

叱りの意味を再考する

——子どもの成長を促す叱りとは——

丹羽 智 美

要 旨

養育者や教育者は何のために叱るのかについて整理し、叱り方が子どもにどう影響を与えているかについてレビューした。まず、叱る意義について整理した。第2に、オペラント条件づけに従って叱りは効果を持っているため、叱りが罰になっていないと効果的ではないことを確認した。第3に、効果的な叱り方について整理した。養育者と教育者は受容的態度を持って子どもに接し、やめてほしい行動を直接伝えたり、理由説明したりするような叱り言葉を使うと、子どもは叱りを受け入れやすくなることがわかった。最後に、子どもが自律的に行動するためには、理由説明する叱りが効果的であることがわかった。それには発達段階を考慮する必要があることも指摘された。

キーワード：叱責者の受容的態度・叱り言葉・自律的行動

はじめに

金子書房から出版されている月刊誌『児童心理』では、「叱る」ことが2、3年に1度特集に取り上げられている。それだけ叱りは常に注目されていると言える。実際、実習など子どもと接する機会をもった学生から、「子どもを叱れない」「どう叱ったらいいかわからない」という声がよく聞かれる。養育の場でも、叱れないこと、反対に叱りすぎることは、養育者または子どもをとりまく大人が頭を悩ませる問題である。このように、叱ることは常に養育、教育の場で繰り返し悩まれてきたのである。

最近「ほめて育てる」ことが注目されている。その影響で叱ることを避けるような傾向がみられる。確かに叱り方によっては子どもによくない影響を与えてしまう可能性がある。しかし、「叱る」と「ほめる」のバランスがあることで子どもの育ちを促すことができるのはよく知られたことである。そこで、叱ることの意味を再度整理しておきたい。

叱る意義

小林（1999）は叱る意義を、子どもが社会の中で生活していくうえで、望ましくないことは行わないことを教えることと述べている。そして淵上（1999）は、小林（1999）の示す意義に加えて、叱る教育的意義を3つ述べている。第1に、子どもの危険な行為または不正・不道徳な行為

を抑制することである。第2に、望ましい行動に変えることを促進することである。第3に、最もふさわしい行動が何であったのか子どもに考えさせることである。

小林と淵上で共通しているのは、社会的に望ましくない行動を抑制することである。しかし、叱る立場にある大人たちの中で、どのようなことが望ましくない行動であるのかについての意識には差がある。例えば、ファミレスで走り回っている子どもを叱る保護者もいれば、放っておく保護者もいる。なぜなら、個々の価値観が異なるからである。例えば前者は「他の客の迷惑になるから、レストラン内を走り回ってはいけない」と思っているかもしれない。後者は「子どもだからじっとしてられない。これくらいしょうがない。」と考えているかもしれない。このような叱られる場面を通して、子どもは自らの価値観を作り上げていく。つまり叱りは、大人の価値観を子どもに伝えることになるのである。そこで、第5の意義としてこれを加えておきたい。

ただ、大人の中で社会的に望ましくない行動の価値観を完全に統一しておく必要はないと考える。例えば、木登りに対して母親は「危ないからやめなさい」と言ったが、父親は「けがしないように気をつけなさい」と言ったとする。すると、子どもには選択の余地がでてくる。また、人によって考えが異なることも知っていくことができる。すると、子どもの価値観の形成に柔軟性が出てくるのである。

しかし、個人の中で価値観が急が変わってしまうのは望ましくない。ある時には叱られたことが急に容認され、また急に叱られるようになると、子どもが混乱してしまう。

叱りが効果を持つメカニズム

叱りが効果を持つのは、学習理論でいうオペラント条件づけによる学習方略に基づいているからである。オペラント条件づけは、ある行動の結果によって、その行動の生起頻度が変容される過程(Reynolds, 1975(浅野訳, 1995))と定義されている。ある行動とは自発的な行動を指しており、その結果とは、自発的な行動に対して与えられる賞罰のことを意味している。例えば、けがをして泣いている友人を介抱したことで先生に褒められた場合、今度同じ場面に遭遇しても同じ行動を起こすことができるだろう。また、危ないからはさみを人に向けてはだめと言われていたが、遊んでいて思わず友人に刃先を向けてしまって、先生に怒られたとする。以後同じ場面に直面した時、子どもは刃先を向けよう気をつけるようになるだろう。つまり、賞を与えるると自発的行動は強化され、罰を与えると自発的行動は除去されるのである。

賞罰はほめる、叱るといった言葉かけだけではない。賞はおもちゃを買う、お小遣いをあげるといった物を与えることも含まれる。同様に、罰はおやつを抜く、無視する、叩くといったことも含まれる。賞はもらってうれしいものであり、罰はされると苦痛であることが該当する。

しかし、叱っても望ましくない行動が除去されないこともある。それは、叱られることが子どもにとって賞になっている、または罰となっていないからだと考えられる。例えば、使ってほしくない言葉ほど子どもは使いたがる。その理由の1つに、それらの言葉を発した際の大人の反応が賞になっていることがある。子どもは言葉を発することで大人が自分に注意を向けることを予

測している。その反応を大人がすれば、言われた内容は叱りではあるが、子どもにとっては賞なのである。この場合、子どもにとっての罰は大人が反応しないことである。大人が反応しないことがわかると、期待していた反応が得られないため、望ましくない言葉は使わなくなる。

どう叱れば効果的か

どう叱れば子どもの心にどう響くのだろうか。幼児や児童に対する叱責に関する研究が少ないため、幅広く研究知見を見て示唆を得ることとする。薊（2010）は、叱責者に対する感情によって叱責されたときにどう感じるかが変わってくることを大学生を対象に検討した。その結果、好かれない他者から叱責された場合、罪悪感が高まるが、嫌いな他者から叱責された場合、屈辱感が高まっていた。

しかし、叱りことばによっては叱責者に対する印象に左右されずに子どもに伝わるものもあるようだ。竹内（1995）は、教師の叱責に対する児童の受け止め方に関する研究のレビューより、やめてほしい行動を直接指摘するような叱り方は、叱責者への印象にかかわらず素直に受け止められやすいことを指摘した。また、「通知表に書くからね」というような権威的脅しを含んだ叱責は、叱責者の印象にかかわらず児童に嫌がられやすかった。

そして、教師からの厳しい叱責は、叱られるのが嫌だからそのようなことをしないようにするにすぎず、反省はしないことも指摘されている（松田・児嶋，2003）。つまり、怒鳴るなどは行動変容に効果があるように思われるが、教師に叱られそうな場面のみにはしか行動変容はなされない可能性が高い。子どもの内面で望ましい行動基準の内化はしていないといえる。

次に、親子関係での叱責場面について見てみる。遠藤・吉川・三宮（1991）は、親の叱り言葉の種類を抽出し、それらを言われた時の子どもの受け止め方について検討を行った。叱り言葉の

Table1 叱り方のパターン（遠藤・吉川・三宮（1991）より引用）

直接的表現

- 1 望ましくない行為の制止（やめなさい）
- 2 望ましい行為の実行要求（勉強しなさい）

間接的表現

- 1 望ましくない行為の指摘（ほら、忘れ物した）
- 2 想起（前にも言ったでしょ）
- 3 望ましくない理由説明（火事になるに決まってる）
- 4 罰の予告（押し入れに入れるぞ）
- 5 望ましくない行為の逆説的指定（勉強したくないなら、するな）
- 6 子ども的人格に対する評価（だらしない子だ）
- 7 突き放し（もう、好きにしなさい）
- 8 問いただし（どうしてお手伝いしないの）
- 9 話者の不快感の表明（おかあさん、がっかりした）
- 10 悪態、ののしりによる不快感の表明（バカ、死んでしまえ）
- 11 世間体意識（ご近所に笑われるよ）
- 12 その他（おれの子だったら、もっとできるはずだ）

罰の執行

- 1 実際に罰を与える（なぐる、ける）

種類を Table1 に示す。その際、親に対してどう返事をするかという外言、子どもが内心思っていることである内言に分けて検討している。その結果、叱責された際に、叱りを受け入れたことを外言で示し、かつ内言での反発が弱いのは、制止などの直接的叱りと望ましくない行為の指摘であった。内言での反発が強く生じるのは、人格的評価と突き放しであった。このことから、教師の場合と同様、直接やめてほしい行動を指摘する叱り言葉は子どもに受け入れられやすいことがわかった。

そして松田・林（2005）は、親の受容的態度による子どもの叱責の受け止め方の差異を検討している。その結果、親が「あなたの気持ちはよくわかる」という姿勢を示した親からの叱責は、自分が悪かったと児童が思いやすいことがわかった。自分のために叱ってくれていることが子どもに伝わり、反省につながりやすいのだろう。

また松田・児嶋（2003）は、小学生が親から叱責されたとき、叱りことばによる子どもの受け止め方を検討した。その結果、なぜいけなかったのかを説明するような叱責は子どもからの反発が弱く、人格を否定されるような叱責や、親の保護を打ち切るようなことを含んだつき放しは、子どもからの反発が強かった。そして、親の愛情を確信できている子どもに対しては、望ましくない行動をしたことに対して親が残念に思っていることを伝えることも、子どもからの反発が弱かった。

以上のことから叱り方には重要な要因が2点あることがわかる。1点目は、子どもとの関係性である。それによって叱責内容を子どもに受け止めさせられるか否かが左右される。2点目は、言葉の使い方である。

コントロールされた叱り

叱りに効果を出すためには、他にどのようなことに気をつければいいのか。

第1に、怒りの制御である。子どもを叱る原因として、子どもが大人の望まないことをしている場合がある。すると、大人はイライラしたりカッとしたりする。大人も人間であるので、怒りを覚えるのは当たり前である。しかし、その表出の仕方を工夫しなければならない。怒りの勢いで怒鳴ってしまえば、大人の感情の発散にしかならない。子どもは嵐が過ぎるのを待つ姿勢になってしまい、大人の意図は伝わらない。また、怒りにまかせて言葉遣いも荒くなっていきやすい。すると、上記の研究結果のように、子どもの反発を招く結果しか生まないだろう。

第2に、叱る際の表情を叱り場面に合わせることである。Mehrabian（1972）は、相手の人が自分に対してどのような態度で接しているのかを判断する情報源として、表情が半分以上を占めることを示している。話している内容は7%しか影響しない。つまり、笑顔で「やめなさい」と言った場合、表情から伝わる情報の方が多いため、叱られているという意識が子どもに伝わりにくくなる。表情と言葉が一致することで言葉の内容が伝わりやすくなるのである。

第3に、普段の生活で子どもに愛している、大事な存在であることを伝えることである。それが子どもの心の安定につながり、叱られた内容への受け入れやすさにつながる。もし、子どもに

愛されている感覚が低ければ、嫌われているから叱られるのだとってしまうだろう。また、大人の都合で叱っているに過ぎないと感じるかもしれない。すると、叱りの意図が伝わりにくくなる。

さいごに；自律的な行動へつなげるには

大人は子どもの行動に対し、「叱られるからやらない」ではなく、「不適切だからやらない」になってほしいと思っている。「叱られるからやらない」では、叱られない状況で自らの行動を社会的に望ましい方向へ制御できなくなるからである。対して「不適切だからやらない」では、状況がどうであっても自らの行動を制御できる。なぜなら、子どもの中に価値観として内在化しているからである。では、どうすればこのように自律的に行動できるようになるのか。

教師から高校生への叱責場面であるが、興味深い知見が得られている。中谷・赤羽・射場・田中・田中（2007）は、自律性を高めるにはなぜいけないのかを説明するような叱責が効果的であることを明らかにした。理由説明をすることによって、「自分にとって重要だ」「自分にとって価値がある」と思えるのだろう。

しかし、その効果は子どもたちの発達段階によると思われる。例えば、小学校低学年くらいまでは、他律的な道徳的判断を行う傾向がある。そのため、「先生がダメと言ったから」といった原則に従って行動しやすい。しかし、小学校中学年以降になると、認知発達としては具体的操作期となり、具体的場面での論理的思考性が整ってくる。すると、理由説明による叱り方は効果が出やすくなる。

ところが、小学校中学年までは理由説明しても意味がないというわけではない。普通の生活の中で論理刺激を与えることで、子どもの論理的思考性が成長する。子どもが理解できるような工夫をした理由説明をすることが、子どもの中に行動原則を内面化させ、自律的な行動を促すことにつながるのである。

叱りはほめと同様、使い方次第で子どもの成長過程により影響を与える。そのため、養育者、教育者にはうまく叱りを活用することが求められる。ほめだけでなく叱りにも平等に効果を認め、双方を適切に使っていくことを期待する。

引用文献

- 薊理津子（2010）. 屈辱感、羞恥感、罪悪感の喚起要因としての他者の特徴 パーソナリティ研究, 18, 85-95.
- 遠藤由美・吉川左紀子・三宮真智子（1991）. 親の叱りことばの表現に関する研究 教育心理学研究, 39, 85-91.
- 澁上克義（1999）. クラス全体を叱るとき、個人を叱るとき 児童心理, 53（12）, 66-71.
- 小林芳郎（1999）. 心にひびく叱り方・ほめ方：「叱る」「ほめる」の心理学 児童心理, 53（12）, 2-12.
- 松田君彦・林 紋子（2005）. 親の叱りことばの表現と子どもの受容過程に関する研究（Ⅱ）：原因の所在に関する認知が受容過程に及ぼす影響を中心に 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 15, 149-156.

- 松田君彦・児嶋晃代 (2003). 親の叱りことばの表現と子どもの受容過程に関する研究(1) 鹿児島大学教育学部研究紀要(教育科学編), 54, 187-203.
- Mehrabian, A. (1972). *Nonverbal communication*. Chicago: Aldine-Atherton.
- 中谷素之・赤羽さつき・射場 淳・田中瑛津子・田中康博 (2007). 教師・生徒関係が叱責場面における動機づけに及ぼす影響について: 自己決定理論の観点から 日本教育心理学会第49回総会発表論文集, 255.
- Reynolds, G. S. (1975). *A primer of operant conditioning*. Illinois: Scott, Foresman and Company. (浅野俊夫(訳)(1995). オペラント心理学入門: 行動分析への道 サイエンス社)
- 竹内史宗 (1995). 教育心理学と実践活動: 子どもは「叱り」をどのように感じているか 教育心理学年報, 34, 143-149.